

# 戦場へ征く、戻る

神子島 健 著

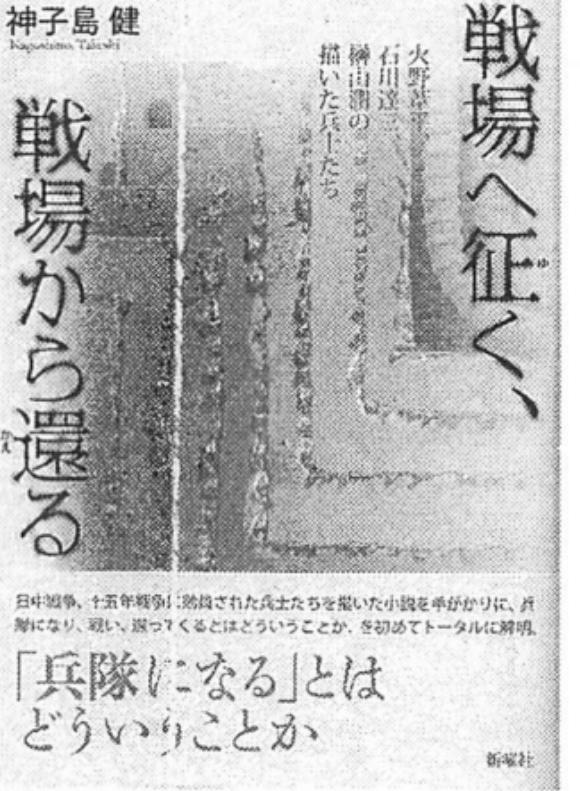
作家の表現と物語の構成を対峙させることで、戦場を描いた文学の新たな読みの可能性を示している。

小説の表現を、その作者の伝記的事実と同時代の言説の現場の力関係の中に位置づけ、その時代状況を生きる人間の感情と意識と行動の史料態としたところに、本書の歴史書としての独自性がある。

軍隊とその外部との差異を理論化し、三人の作家の戦争への関わり方、すなわちどのように加担し、抵抗し、そして戦後にいかなる捉え直しをしたかという厳しい問いの中に、本書の思想書としての要がある。

筆者は、小説で表現された戦場の現場表現の分析を徹底して精密化することによって、戦時下におけるメディア状況を詳しく考察している。戦争をめぐる体験、経験、記憶を、どのように言葉で伝えることができるのか、という問い合わせで貫いてもいる。その意味でメディア社会思想史を切り拓いた著作でもあるのだ。

本書は文学書であると同時に、歴史書であり思想書でもあろうとする、稀有な知的挑戦に貫かれている。 文学書としては、戦中戦後にベストセラー作家であつた二人と、現在においてほとんど忘れられた一人の



神子島 健  
Kensei Imaizumi

戦場から戻る

「兵隊になる」とは  
どういふことか

東京大学助教  
(新曜社、5200円+税)